

# しあわせのパン

hichakko

私には言う権利がある。

なぜなら私はパンを買いに来たお客で、彼はこの店の店員なのだから。

「ちょっと待って！」

狭い店内で私の声は実によく響いた。

今まさにチョコレートがたっぷりかかったデニッシュを袋に入れようとしていた青年は、びくりと凍結する。

青年はまだ若かった。10代後半くらいだろうか。私より年下なのは確実だ。

顔は割と整っている。エプロンの下に隠された私服も中々オシャレだ。手首に巻き付けられた革バンドなどの小物使いも上手い。

そのせいか、彼が働き始めてから明らかに女性客も増えた。私も初めてレジで向き合った時はドキリとしたものだ。

しかし、だからと言って許される問題ではなかった。

彼は私を怒らせた。その事実は変わらない。

私は目深に被った帽子の鍔の下からキッと青年を睨み上げると、今まで押し隠していた鋭い牙（※八重歯ともいう）を口角から覗かせて容赦なく罵声を浴びせた。

「なんでそれを一緒に入れるの!？」

「……………」

「君、お湯の中に氷を入れたらどうなるか分かる？」

「……と、溶けます」

私の勢いに気圧されて、青年がしどろもどろに答えた。

「じゃあ焼きたてのパンが入った袋の中にそれを一緒に入れたらどうなりますか！」

彼は自分が右手に掴んだチョコレートデニッシュと、左手で広げた他のパンが詰め込まれた袋を交互に見比べてから、小さく答えた。

「……チョコが溶けます」

「その通り！ ドロッドロにね！」

ビシッと人差し指を彼の胸に押し付けて、さらに私は彼に詰め寄る。

「君は過去に2回同じミスを犯しています。今日は3回目。いい加減に気づきなさい！ 少し考えれば分かることでしょう!? 君はコンビニでお弁当を温めてもらったことはないの？ その後一緒に冷たい飲み物も同じ袋の中に入れられた？ 入れられてないでしょう？ 温かいものと、冷たいものもしくは溶けるものは同じ袋に入れない！ これ常識だから！ ジョーシキ！」

一度怒った私の勢いは止まらない。

言いたいこと全部言わないと気が済まない。私はさらにまくしたてた。

「あと君はパンの扱いが雑過ぎる！ 早く袋に入れればいいってもんじゃないのよ！ 私はスピードを求めているんじゃないの！ 家に帰って美味しいパンが食べれたらそれでいいのよ！ それなのに君は、私がこれだけたくさんパンを買ったのにこんな小さい袋に入ると思う？ ええ、入りますとも！ 無理やりぎゅうぎゅう詰めにしたらね！ おかげで私が家に帰った時には1番下の

パンはもれなくぺちゃんこよ！ クリームパンなんかを1番下に持ってこられた日には最悪だったわ！ このにっこり笑顔がクリーム飛び出して大号泣ものよ！ 分かる、この気持ち！？ さらにこのミルクフランス！ 細長いからビニール袋からはみ出るのはしょうがないと思うわ。でもね、ギリギリビニール袋に入る大きさなのよ、ちゃんと丁寧に巻き付けるようにパンを入れてセロテープで止めてあげればね！ けど君はその過程すっ飛ばしただけでなく、ビニール袋の口を下にして他のパンと一緒にしてくれるおかげでね、中身でてんのはよ、袋の中で！ しかも君がぎゅうぎゅう詰めに入れてくれてるおかげで、クリームは飛び出してるし、カクッとくの次に折れ曲がってるしで、いざ食べようと思った時の私のこのガックリ感が分かるかしら！？ いい？ 食べ物は味も大事だけど、見た目も大事なの！ 見た目も美味しさに入るの！ 君の仕事はただお金をもらってパンを袋に入れるだけじゃない！ このパンたちの美味しさをそこなわずに、細心の注意を払って袋に入れるのが君の仕事！ そこんとこ君分かってる！？」

一気にまくしたてたせい呼吸困難に陥りそうなくらい息が荒れていた。100mを全力疾走した後の気分だ。

しかし、彼は私にそれだけのことを言われたにも関わらず、呆然と立ち尽くしているだけだった

。

ごめんなさいも、すみませんも、ない。

私の怒りはこれだけでは収まらなかった。

「私はね、ここのパンが好きなの！ 月曜日から金曜日まで上司の嫌味にも同期の悪口にも後輩の邪魔にも耐えて耐えて耐えまくって、山積みの仕事を毎日毎日毎日サービス残業で夜遅くまでこなして、やっと休みがきた朝、めいっぱい寝坊した後にここのパンを朝ごはんに食べるのが至福の瞬間なの！

人間はね美味しいもの食べてる時は幸せになれるのよ！ それなのに君のせいでいつも台なしよ！ 台なし！ 今まではパンが美味しいから我慢してたけどもうダメ許せない！ 君はここで働いてる人間なんだから、もっとパンをもっと大事に扱いなさい！ 君のせいでこの店のパンの品位を落とすようなことはしちゃダメでしょう！？」

「.....すみませんでした」

ようやく彼は神妙に謝罪した。

その表情はどこかあどけなかった。

傷ついているというよりは、なんか目からウロコが落ちた後のような。じっと真っ直ぐこちらを見つめられて、私の怒りは急激に冷めていった。その代わりに一気に羞恥心が目覚めていく。

しまった、今日はすっぴんだった。

眉毛は書いてないし、日頃溜めに溜めたストレスのおかげで肌の調子も最悪だ。でももう気づいても遅い。

私、すっぴんで、パン屋で、しかも若い男の子の前で、何やってんの？？

私は慌てて財布の中から千円札を取り出すと、カウンターに勢いよくバーンと置いて、青年の手からパンの袋をひったくった。

「お釣りはありませんから！」

最後に捨てゼリフのようにそう叫んで、駆け足で店から飛び出す。

.....なんということをしてしまったのだ。

家に帰って、やっぱり潰れていたクリームパンと、くの字型に曲がったミルクフランスと、チョコレートがちょっと溶けたデニッシュを食べながら、怒るところか私はものすごく後悔していた。

ああ、お気に入りのパン屋さんだったのに。もう恥ずかしくて行けない。

頭ごなしに怒鳴るなど大人気なかったと思う。

次から気をつけてね、みたいな大人な態度で注意すればそれで良かったのに。

もしくは怒るにしても、家に帰ってから電話ですれば良かった。

鼻をつまめば声が変わって誰だか特定するのは難しかっただろう。特にあの店は女性客が多いし。

それなのに正面切って怒鳴り散らしてしまったせいで、確実に顔が知れてしまった。

彼はもう私の顔を忘れないだろう。確実にブラックリスト入りだ。

最後にじっと私の顔を見ていたのは、そのためだったに違いない。

そして他の店員にも伝えられるだろう、こういう客が来たら要注意ですよ、と。

しかも後で財布を開いた時、私はとんでもないミスを犯していたことに気づいてしまった。

なんと千円札を出したつもりで、一万円札を出していたのだ。

あれだけ怒っておいて、釣りはいらねえ！って一万円札置いて逃げる客とか、どんだけ気前いいんだ。恥ずかし過ぎる。

.....ああ、もう泣きたい。

数日後、私はあのパン屋の前を通った。

店に入りたい衝動をぐっところえ、ガラス張りの店内を凝視する。

ああ、今日はプリンがある！ 滅多に巡り会うことができない幻のプリンが！

店主の気まぐれで作られる上に、あっても数が少なくすぐに売り切れるため、店に並んでること自体ものすごく希少なのだ。

だから見つけたら即買いすることをにしていた……この前の一件が起きるまでは。

うう、プリン食べたい。食べたいよう。

諦めきれずに店の前でウロウロしていると、突然店の扉が開いた。

中から親子連れと店員のあの青年が出てくる。

親子が出やすいように扉を自分の体で支えながら、青年が気持ちのいい笑顔で「ありがとうございました」と頭を下げていた。

それに対して母親の方もお礼を言って、娘は「ばいばい」と手を振る。

私はめざとく母親が下げている二つの袋のうち、一つにプリンが三つ入れられているのを見つけてしまった。わあ、もう三つも売れてる！

女の子に手を振り返っていた青年が、店の中に戻る前にふと視線をあたりにさ迷わせた。

——そして、私と目が合った。

「あ」

げっ、バレた！

私の行動は迅速だった。

さっと踵を返してその場を立ち去る……つもりだった。引き止められなければ。

「ちょっと待って！」

私が先日ぶちギレる前に彼に発した最初の言葉と同じだった。仕返しか。仕返しが来るか。

腕をつかまれたので、恐る恐る振り返った。

身長は彼の方が明らかに高いので、こちらが見下ろされる形になる。

「この前のお客さんですよ？」

いいえ！ 人違いです！

……と言って逃げられたらどんなに良かったか。

彼は明らかに確信を持って私を引き止めているし、こっちも逃げようとした時点で誤魔化しようもない。

おとなしく私は頷いた。今日はすっぴんでないのが唯一の救いか。

「少し時間をもらってもいいですか？」

顔貸せてことか。

いよいよ危ない雰囲気だ。逃げたい。

しかし、彼は掴んだ手を離す気はないようで、何も言わない私を承諾したものと受け取り、ズルズルと店の中まで引きずっていった。意外に強引だった。

懐かしくも大好きな甘いパンの匂いに、私は涙が出そうになる。

ああ、パンが食べたい。パンが食べたい。プリンも食べたい。

青年はレジに入るとパチパチっと何かを打ち込んで、キャッシャーを開けると、中からお札と小銭を出して私に差し出した。

「この前のお釣りです」

9076円。よく覚えていたものだ。

「本当にすみませんでした」

さらに深々と頭を下げられ、私はぎょっとする。どうやら仕返しではないらしい。

「俺、将来パン職人を目指してるんです。そのために専門学校出て、ここに就職が決まった時は嬉しくて。でも専門学校で作り方を習ってるから、パン屋に就職決まったからって、すぐパンを作る側になれるわけじゃなくて、まずレジに入れって店長に言われたんです。それが俺にはどうしても納得いなくて、内心すごくふてくされてました。レジなんて俺じゃなくても誰にでもできる仕事だって。俺はパンを作りたくてここに来たのにつて」

.....そうだったのか。

ただのバイトだと思ってたけど、彼には彼の事情があったわけだ。

でも自分の思い通りにならないからって、ふてくされてお客に当たるのはやめてほしいが。

「でもそんな時にあなたに怒られて、目が覚めました。俺は大事なことを分かってなかった。パンを作るだけでなく、食べてもらうまでの過程も大切なんだって。たかがレジの仕事、と俺はあなどって真剣にやっていませんでした。あなたの言う通り、それまでの俺はこのパンを台なしにしてた。全然大切に扱ってなんかなかった。何も考えずにただ機械的にレジを打ってただけの馬鹿だったんです。そのこと気づいて、ものすごく反省しました。パンを大切に扱えない奴が、パン職人になれるわけないつて」

いやそこまで落ち込まなくても。

ヒヤヒヤしながら見守っていると、そこで青年はカウンターから出てきてトレイを取った。

「けど、あなたに言われて嬉しかったこともあるんです。このパンが好きって言ってくれましたよね」

「ええ、ああ、はい」

確かに言った覚えがある。

「人間は美味しいもの食べてる時が幸せって言われて、確かにそうだなって目からウロコが落ちた気分でした。そしてあなたにとっての幸せはこのパンを食べてる時だって分かってすごく嬉しかった」

青年はいつも私が買っていたパンを次々とトレイにのせていく。

ええ、なんで知ってるの!?

「俺もそういう風に食べた人を幸せにできるパンを作りたいって強く思ったんです。今はまだ生地にも触らせてもらえてないですけど、いつか俺が作ったパンもあなたに食べてもらいたい」

「.....」

なんかものすごくステキなことを言われている気がする。

しかしそれに対してどう返事を返していいものか分からなくて、私は必死に頭を巡らせた。

えーと、えーと、「楽しみにしてます」とかどうかな？

「だから、また来て下さいね。これからも」

「……はい」

結局素直に頷くことしかできなかった。

丁寧に袋詰めされていくパンを見ながら、私は心が温かくなっていくのを感じた。

またこのパンが食べれるのが嬉しい。でもそれ以上にこの店に来て、いつか彼の作ったパンも食べれるのかと思うとさらに嬉しい。

「お代は結構です」

「え、でも……」

「この前のお詫びなので」

そう言って、袋を二つ差し出される。

一つにはパン、もう一つにはプリン。

——ちゃんと分かってるじゃないか。

青年に店の扉を開けてもらって外に出た。

前はここまでしてもらった覚えがないので、やっぱりいい意味で成長したんだなあ思う。

親子を送りだした時と同じように、気持ちのいい笑顔で「ありがとうございました」と頭を下げられる。

私は数歩進んでから、不意に足を止めた。

そして、振り返って言った。

「また来ます。いつか君の作ったパンも食べたいから」